

---

# トランプ

seru

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
トランプ

【Nコード】  
N2853R

【作者名】  
seru

【あらすじ】  
「だって、僕達は神様のための存在だもの」

名前を知らない真っ白な少年とその世界。  
懐かしくて、愛おしくて、遠い世界で探す、大切なもの。

## 公園の少年

まだ来ない。少年はいつまで待てば良いのかと途方に暮れながら、待ち続けていた。

### 【公園の少年】

その少年は少し変わった風貌をしていた。白いニット帽と白いコートを身に付け、ニット帽から覗く髪も白い。肌もまた、透き通るように白く、零れ落ちそうなほど大きな瞳だけが黒かった。そんな容姿のせいなのだろうか、纏う雰囲気には妙な崇高さがある。

少年は公園のベンチに座りながら小さく溜め息を吐くと、徐に空を見上げた。雲の流れが速い。薄暗い空から地面へと視線を落とすと、少年は再び溜め息を吐いた。

雨が降ってきたら、どうしようか。

そう思うや否や、少年の白い手に水滴が落ちてきた。地面に作られた水玉模様が、段々と色濃く浸食していく。少年は三度目の溜め息を吐くと、被っていたニット帽を引っ張り、深く被り直した。

ふと、柔らかな影が差しこんできたと思ったら雨が当たらなくなり、少年は顔を上げた。そこには見知らぬ少女が傘を広げて立っていた。鮮やかな黄色い傘。セミロングの黒髪の上で、それは存在を主張している。

少女は少し驚いたように目を見開き、けれどもすぐに柔らかく微笑むと、少年に傘を差し出した。

「これ、使ってください」

少年は怪訝そうな顔で少女を見つめる。少女は微笑みを浮かべたまま、もう一度、少年の手に渡すように傘を差し出した。

「どうぞ、差し上げます。私、折り畳み傘持ってるんで」

そう言つと、片手で器用に鞆から折り畳み傘を取り出して見せる。ピンク色の小さな折り畳み傘。少年はおずおずと傘を受け取ると「ありがとうございます」と呟いた。

「いえいえ。雨で体を冷やすのは良くないですから」

そう言つて少女は笑い、折り畳み傘を開いた。そんな彼女を、少年はぼんやりと見つめる。ピンク色の傘は、少女を雨から守るには少し小さいように思えた。

少女は「じゃあ、私、行きますね」と軽く頭を下げ、公園の出口まで歩いていく。そして、ふいに振り返つた。

「あの……っ」

少女の声に、少年は彼女を見やる。少女は傘を叩く雨音に負けないうよう、少し大きな声を上げた。

「最初はビックリしましたが、すごく綺麗な髪ですね！ 真つ白で」

少女の言葉に少年は、零れ落ちそうなほど大きな目を更に大きく見開いた。その黒い瞳には、照れたようにはにかむ少女が小さく映っている。

それから、少女は柔らかく手を振つて、公園から立ち去っていく。少年は黄色い傘の柄を握り締め、俯いた。

「……変な人」

その声音はどこか明るい。少年は帽子からはみ出た白い髪を指に絡め、さらりと解くと、帽子をもう一度引つ張つた。

まだ来ない。雨も止みそうにない。けれど、もう溜め息は出なかった。

暫くして、一羽の白い小鳥がひらりと公園に舞い込んだ。小鳥は少年の持つ傘を不機嫌そうに突くと、少年の膝へと緩やかに降りる。ぱちりと、少年と小鳥の目が合った。

「遅かったね」

少年の言葉に伝えるように小鳥が鳴き声を上げる  
た。

鋭い声だっ

## 教室の少年

夕陽の赤が教室を照らす。少女は眉間に皺を寄せ、少し思い詰めたような表情をしてから、机に突っ伏した。

### 【教室の少年】

教室には少女一人を除いて、誰もいなかった。そのはずだった。けれど、ふいに小さな物音が響く。少女が顔を上げると、窓のすぐ傍に見知らぬ少年が立っていた。穏やかな赤い光を静かに受け続ける、白いニット帽を被った少年。

「誰……？」

窓の外を覗き込むようにしていた少年はその声に振り向き、少女の姿を瞳に映した。少女は怪訝そうに目を見張っている。

「ごめんなさい。起こしちゃいましたか」

少年は申し訳なさそうに眉をハの字にし、けれども柔らかく微笑んだ。

「学校の人、じゃないよね。貴方、誰？」

少女は椅子から立ち上がると、少年を睨んだ。セーラー服の赤いスカーフが、少しだけ揺れる。少年は困ったように、大きな黒い瞳を細めた。

「僕は危ない者じゃないので、お気になさらず」

少女は眉を顰めると、ゆっくりと少年へ歩み寄った。ぎゅっと握り締められた手は、微かに震えている。

「充分怪しいじゃない」

「いや、怪しいけど危なくないんで」

少年は俯きながらそう言つと、ニット帽を引っ張り、深く被った。少女がその言葉に納得するわけもなく、ぐいと少年の顔を覗き込む。そして、ぱちくりと瞬きを繰り返した。

「見間違いかと思ってただけ……それ、染めてるの？」

少女は、ニット帽の下から覗く少年の髪を指差した。少年の幼い容姿とは釣り合わない真っ白な髪。少年は無言で、緩やかに首を横に振った。少女は躊躇うように視線を彷徨わせる。そして「アルビノ、とか？」と問う声は小さかった。

「いえ、病気ではないんです。ただ、白いだけで」

少年は小さく笑って「神様が塗り忘れたのかもしれませんが」と言った。少女は困惑した表情で沈黙する。

「じゃあ、僕は行きます」

少年が出入口に向かって歩き始めようとすると、ふいに腕が引かれた。少女が少年の白いコートの袖を掴んでいる。

「誰だか知らないけど、何で此処にいたの？」

少女の言葉に、少年は押し黙る。それから、少女に気付かれないよう、小さく溜め息を吐いた。

なんて答えようか。全部を話す必要もない、本当なら、ここで立ち止まる必要さえなかった。

「探し物があるんです。でも、僕がここにいる理由より、君がここにいる理由の方が大事でしょう？」

「……どういう意味？」

少女は少年の瞳を真っ直ぐに見つめる。吸い込まれそうな錯覚に陥りながらも、黒い瞳から目を逸らさなかった。少年はそっと少女の手を振り解く。

「君の方が、探し物をしている顔をしているってことです」

少女は眉を寄せ、小さく俯いた。そんな少女の頭を、少年の優しい掌がそっと撫でる。

「別に、私は……ちょっと帰りたくなかっただけ」

少女の声は震えていた。

そんな顔をしているつもりはなかったのに。驚きと不安と、少しの安堵。

不思議な感覚に、少女は足元がふらつくような気がした。

少年は「うん」とだけ応える。少年の白い掌は、もう少女の頭から離れていた。

「君は、大丈夫。君なら、ね」

ふわりと包み込むような口調だった。少年の言葉を理解出来ず、少女は首を傾げる。少年は静かに微笑むと、立ち止まっていた足を再び歩ませ始めた。少女はその場に立ち尽くしたまま、茫然と少年の背中を見送る。

やがて足音が聞こえなくなり、少女はハッとしたように窓の外を見た。校庭には白い影、先ほどの少年の姿。その周りをくると、白い小鳥が飛んでいる。少女はそのまま、少年の姿を見つめ続けた。学校の外に出るまで、見つめていた。

そして、少女は自分の鞆を持つと、自分も教室から出ていった。

少年が少女の前に姿を現すことは、もう二度となかった。



## 病院の少年

少女はクマのぬいぐるみを大事そうに抱え、窓の外を覗き込む。  
下の広場に白い小鳥と戯れる少年の姿を見つけると、少女は思わず  
病室を抜け出した。

### 【病院の少年】

「お兄ちゃん、何してるの？」

少年は小鳥を指に寄せ、声のする方向に顔を向けた。幼い少女が  
少年と小鳥を見つめ、目を輝かせている。その腕に抱かれているぬ  
いぐるみは、少し草臥れているように見えた。

「君は……？」

少年が少女に話し掛けると、小鳥は不機嫌そうに少年の白い指か  
ら飛んでいった。空高く舞い上がった小鳥を見て、少女は残念そう  
に声を漏らす。

「あ、小鳥さん……」

少女は空へと首を伸ばして、小鳥の姿を目で追い続ける。少年も  
同じように小鳥を目で追っていたが、やがて少女へと視線を移した。  
「気にしないで。ファテは人間が嫌いなんです」

「ファテ？」

「あの小鳥の名前です」

少女は「ふうん」と応え、ぬいぐるみをぎゅっと抱き締めた。

「お兄ちゃんは、ファテと仲良しで良いなあ」

どこか拗ねたような口調で少女は言う。少年は少女の前でしゃが  
み込み、「そうですか？」と少女の顔を見上げた。

「うん。ユキ、鳥さんとか、猫さんとか犬さんとかね、一緒に遊ん  
だことないから」

「遊んでたわけじゃ……」

思わず苦笑いを浮かべる。少年は少女の持つぬいぐるみをそつと撫でた。「この子は？」という少年の問いに、少女はきらきらと目を輝かせる。

「くうちゃんっていうの。パパが買ってくれてね、ユキのお友だち……っ」

突然、少女は咳き込み、その場にしゃがみ込む。少年は慌てて、少女の背中を擦った。

「大丈夫？ えっと、ユキちゃん？」

少年の問い掛けに、少女はぬいぐるみをきつく抱き締め「大丈夫」と言った。けれども、とてもか細い声。その顔は少し青ざめていた。

「部屋に戻って、休んだ方が良くないですか？」

少年の言葉に、少女はしゃがみ込んだまま首を横に振った。

「だって、お部屋、白いもん。真っ白だから、怖い」

それを聞いて、少年は眉を寄せると、少女の背中を撫でていた手を引っ込めた。「そっか」と呟き、立ち上がる。少年のその動作に、少女は慌てて顔を上げた。

「お、お兄ちゃん！ 行っちゃうの？」

少年は沈黙したまま、切なげに少女を見下ろし、その場に立ち尽くしていた。少女は必死な表情を浮かべて、少年の白いコートの裾を握り締める。ぬいぐるみが地面に、音を立てて落ちた。

「やだ、やだやだ。ユキ、独りにしないで！」

少年は困ったように微笑み、地面に転がったぬいぐるみを拾い上げた。そして、砂を軽く叩き落とすと、少女に差し出す。

「君は……ユキちゃんは、僕のこと、怖くないんですか？」

ぬいぐるみを受け取った少女は、少年の言葉に、その澄んだ瞳を丸くした。

「どうして？ 怖くないよ？」

「……だって、僕は、白いでしょ？」

少女は少年の手を握った。そして笑う。純真無垢な笑顔だと、少年はそう思った。

「お兄ちゃんは、温かいから好き」

その声は、少年の耳を優しく撫でる。少女の言葉に少年は、胸が歡喜に震えるのを感じた。「ありがとう」と言う声が少し震える。少年の手を握る少女の手が、何かを確かめるように、ぎゅっと強くなった。

刹那、上空で小鳥の鳴き声が響いた。鋭く、空気を突き刺すような声。少年は空へと目を向けた。

「ユキちゃん、ごめん。僕はそろそろ行かないと、怒られてしまうみたいです」

少女の瞳が哀しげに揺れる。それに気付いた少年は、そっと少女の頭を撫でた。

「また、会いに来ますから」

「……本当？」

「本当です」

そう言った少年の胸が少し痛んだ。この言葉が殆ど嘘であることを少年は知っている。けれど、知らない振りをして、胸の痛みを押し隠した。

「だから、また僕が来るまでに元気になってください。今は部屋で休んで、ね」

「うん」

少女はぬいぐるみを抱き締め、満面の笑みを浮かべる。その笑顔に応えるようにして微笑む少年の表情は、どこか寂しげだった。

少女が病棟に入ったのを見計らったかのように、小鳥が少年の肩に舞い降りる。

「 うん、ごめん」

少年は呟く。そして、指に小鳥を乗せると、顔の正面へと持ってきた。

「でも、無駄足なんかじゃないよ」

少年は柔らかく微笑んだ。小鳥は不機嫌そうに鳴き声を上げ、少年の指から優雅に飛び立つ。少年は苦笑いを浮かべながら小鳥の後を追ひ、病院から去っていった。

## 道端の少年

淡い桃色の花を咲かせる桜の木の枝は、公園の敷地からはみ出し、道路に花びらを落としている。季節に不釣り合いな白いコートと白いニット帽を身に付けた少年は、その枝の下に立っていた。

### 【道端の少年】

青年がその少年を初めて見掛けたのは三日前だった。その日からずっと少年はそこにいる。桃色の花をじっと見つめ、ただ静かに佇んでいる。

そんな少年に、青年はゆつたりとした足取りで歩み寄った。

「何をそんなに見つめているんだ？」

少年は、緩やかに視線を花から青年へと移した。そして、どこか儚げにふわりと微笑む。

「見逃してしまわないようにと思ひまして」

そう言つて、少年は再び視線を花へと戻す。それからぽつりと零れ落ちた「僕の探し物を」という呟きは、辛うじて青年の耳に届いた。青年には少年の瞳が、何か祈りに似たものを含んでいるような気がしてならない。少年の漆黒の瞳は、哀しげに揺らいでいた。

青年は掛けていた眼鏡を外すと、ポロシャツの裾でレンズを拭いた。そしてまた眼鏡を掛けると、桜を見上げる。桃色の花びらが、ひらりひらりと風に舞った。

「この世界は、美しいと思いますか？」

「……え？」

唐突な質問に、青年はぽかんと口を開けた。ふいに、青年と少年

の目が合う。少年は微苦笑を浮かべると、困ったように首を横に振った。

「すみません……何でもありません」

そう言って俯く。青年は首を傾げることしか出来なかった。

ざあっと、二人の間を風が通り抜ける。桜の花びらを攫うように、散らすように。少年はもう一度桜の木を見上げた。

「……人は、世界を自分のフィルター越しに見るでしょう」

だから、ちよつと興味があつただけなんです　この言葉を少年は飲み込んだ。青年は黙り込み、ただ少年を見つめ続ける。短いうにも長いようにも感じる沈黙は、少年によって静かに破られた。

「多分……僕は、怪しく見えるでしょう？」

苦笑交じりに囁かれた言葉に、青年は目を丸くした。そう思う気持ちがあるせいで、否定の言葉は喉に詰まる。漆黒の瞳以外が真っ白なその少年は、どうしても、どこか浮いた存在に見えてしまう。

「危険人物ではないんですけど、やっぱり不審人物なんです」

「……まあ……それは、見た目が」

「はい、それは分かります」

どこことなく、きつぱりとした口調だった。青年は目を細めて、少年を上から下まで観察した。全身が白で覆われていて、その白が太陽の光を反射している。どこか儚げで神々しく、少しだけ眩しい。

「白以外の色を身につけたらどうだ？」

その言葉に、少年はぎゅっと眉を寄せた。躊躇いがちに「機嫌を悪くしてしまうんで」と呟く。徐に見上げた桜の隙間から覗く空は、ほんの少し白んでいた。青年には、少年の言葉の向かう先が分からない。

再び訪れた沈黙。少年はそつと桜の木に手を差し出すようにして、腕を伸ばした。まるで桜の花びらを掴もうとしているように見える

掌。青年は、その白い掌を見つめながら、少年の言葉を反芻していた。

「……そういえば、探し物って？」

ふいに放たれた青年の言葉に、少年は少し戸惑ったような表情を浮かべた。言葉を探すように口を開いては閉じる。

ひらりと掌に舞い降りた桜の花びらを握り、それを胸に当てるようにして少年は目を閉じた。

「それは、僕の大切な……大切な」

その声は、切実に何かを求めるような響きを孕んでいて。それ以上の言葉は出て来なかった。

どこからやって来たのか、白い小鳥が滑るようにして少年の肩に止まった。少年は小さく頷くと、青年へと向き直った。

「すみません、長話をしてしまって」

少年の言葉に、青年は面食らったような顔をした。そしてどこか気まずそうに頬を掻く。

「いや、俺から話し掛けたんだし」

そんな青年に対し少年はふわりと微笑むと、丁寧にお辞儀をして、その場から立ち去ろうとした。しかし、青年の「おい」という声が、少年を引き止める。

「あのさ、お前、名前は？」

少年は困ったように視線を彷徨わせると、苦笑いを浮かべた。

「僕は、名前を知らないんです」

そして、少年はもう一度お辞儀をすると、今度こそその場を立ち去った。

青年は暫くの間、少年が姿が見えなくなったその方向を、ただひたすらに見つめていた。

## 海辺の少年

「しろくん」

髪の白さを隠すように白いニット帽を被った少年は、その声に振り向くと、ふわりと優しく微笑んだ。

### 【海辺の少年】

三日前、少年は白い砂浜の波打ち際に立ち、白い素足を海水に浸しながら水平線を見つめていた。天上にあった太陽がいつの間にか海を赤に染め、あつという間に世界が黒く染まっていく。

そんな光景を二回ほど繰り返し見ていると、ふいに肩を叩かれ、少年はびくりと肩を震わせた。

「何、してるの？」

活発そうな顔をした見知らぬ少女が、少年の顔を覗き込む。少女のポニーテールが、彼女の動きに合わせてひらりと揺れた。少年は驚いたように二、三度瞬きしてから、穏やかに微笑んだ。

「海を、見ていました」

「……裸足で？」

苦笑を浮かべながら少年は頷き「水が心地良かったので」と答える。少女は何かを思案するように少し間を開けてから、戸惑ったように口を開いた。

「三日間も？」

「……はい」

「どうして？」

少年は少女を見つめて押し黙る。静かに吹き抜ける風が、少年と少女の頬を撫でた。



「探し物を、していました」

少年がポツリと呟く。少女はゆるりと首を傾げ、「探し物……」と言葉を口の中に転がした。

「この景色があまりにも綺麗だったので、ここにいれば見つかるんじゃないかなんて……」

少年は「そう上手くはいきませんね」と微笑笑を浮かべる。少女は何を言うべきなのか分からないまま口を開いて、結局何も言わずに閉じた。気まずそうに視線を彷徨わせる。なんとも言えない居心地の悪さを孕んだ沈黙が降りてきた。

そんな中、躊躇いがちに口を開いたのは少女だった。

「私、チヒロっていうの。君は？」

「……僕、名前は知らないんです。名前が無いのかもしれない」  
「へ？」

少女は驚いたように目を見張り、困ったように帽子を引き下げた少年をまじまじと見つめた。それから「名前言いたくないの？」と囁く。少年は肯定も否定もせずに俯くだけだった。

再び訪れた沈黙。ふいに、少女は「うん」と頷くと言いつた。

「分かった。じゃあ、君はしろくん。しろくんって呼ぶから」

「は、い？」

今度は少年が目を見開く番だった。戸惑う少年に構わず、少女は満面の笑みを浮かべて続ける。

「しろくんの探し物、私も手伝うね」

潮風の匂いが、二人の鼻腔を優しく擦った。

「しろくん」

少女の声に少年は振り向き、微笑む。また日が沈み、日が昇ったというのに、少年は足を海に晒したままだった。少女は嬉しそうに

笑い「しろくん」ともう一度呼んだ。

「はい、何ですか、チヒロさん」

「しろくん。あのね」

少女は少年の耳元で「嬉しいの。しろくんって呼べるのが」と囁く。少年ははにかむように笑った。

「……貴女が名前をくれたから」

「うん。ねえ、しろくん」

少女が何かを言おうと身を乗り出したその刹那、上空に鋭い鳴き声が響いた。二人が見上げると、白い小鳥がくるくると円を描いて飛んでいた。

「……ファテ」

「え？」

少女が「今、何て言ったの？」と聞き返す。少年はゆるゆると首を横に振った。

「時間切れ、です」

そう言って、少年は濡れて砂の付いた足をそのままに、傍に置いてあった白い靴を履いた。少女は戸惑ったように「どういうこと？」と問うと、少年の手をぎゅっと握る。

「もう行かないといけないんです。僕達は、あまり一ヶ所に留まってはいけないから」

「……意味が分からないよ？」

「貴女とは、もう少しお話したかった」

「ねえ、待っててば！」

叫ぶようにそう言って、少女は少年の手を握る手に力を込めた。少年は困ったように眉をハの字にして、それから「ありがとう、チヒロさん」と穏やかに笑う。少女は泣きそうに眉を顰めた。

「……し、ろくん、は……何者、なの？」

少年は、自分の名前を知らないと言った。名前があるのかすら分

からない。

それなら、君は何者なのか。

「答えがあるとすれば一つだけ……僕達はトランプっていうんです」

少年は綺麗に微笑んだ。ふわりと少年の肩に小鳥が舞い降り、少年は小さく頷く。そして少女に握られていない方の手で少女の手に触れ、手を離すように促した。

「全然、意味分かんない」

少女は震える声でそう言って俯くと、そっと手を離した。少年は「ありがとう」と囁く。小鳥が焦れたように鳴き声を上げた。

「……チヒロさん」

「なに」

「名前をありがとう」

少女はパツと顔を上げ、切なげに少年を見つめた。少女の泣きそうな表情に、少年は困ったように視線を彷徨わせる。それからそつと少女の頭を撫でた。

「『しろ』って名前、大切にします」

「そんなの、私が呼びたくて付けただけなのに」

「……僕も、呼ばれて嬉しかったんです」

少年は微笑んだ。少女は堰を切ったように続ける。

「探し物も手伝ってない」

「……それは」

「手伝うって言ったのに」

「いいんです、それは」

少年は、小さな子供を見守るような表情を浮かべた。零れ落ちるようにして呟かれた「多分、僕にしか見つけれられない」という声は、小さ過ぎて波音に掻き消されてしまう。当然、少女の耳には届かなかった。

「もう、行きますね」

「……待つ」

「僕のことは忘れてください」

歩き出した少年に、伸ばした少女の手は届かなかった。少女は膝から崩れ落ちる。

波音ばかりの静かな海辺に、小鳥の鋭い鳴き声が響いた。

## 屋上の少年

屋上から見下ろした世界は街灯りに溢れていて、けれども、とても遠い世界のように感じた。頭上に輝く星々を、街の灯りが隠してしまっていることを少年は知っている。

### 【屋上の少年】

「この世界は、遠いなあ」

屋上の柵から身を乗り出すようにして下を眺め、少年は呟いた。道路には次々と灯りが行き交い、世界は忙しく動いているように見える。

「そりゃあ、遠いだろ」

少年の隣で体育座りをして、柵に背中を預けている少女が応えた。少女の長い白髪が風に揺れ、髪飾りの鈴が小さく音を立てる。少年は白いニット帽を深く被り、その白い髪を隠した。

二つの白い影は、暗い夜の屋上では浮いた存在だった。一方は、白いニット帽に白いコートを羽織った幼い少年で、もう一方は、白い着物に白い袴を合わせた少女である。どちらも抜けるように白い肌と髪を持ち、けれども瞳だけは夜闇のように黒かった。

「この世界と私達は次元が違うんだ」

「うん」

「私達のことなんて知らないんだ、この世界は」

「うん」

「神様のことさえ知らない」

「うん。でも……」

少年は儚げに目を伏せた。そして「それでも僕達は此処に在る」、そう小さく呟く。少女は無表情に天を仰いだ。星が見えずに月だけ

が見える、薄ぼんやりとした夜空を。

「僕達は生きてるのかなあ」

少年は柵に両腕を乗せ、その上に額を乗せた。くぐもった彼の声に、少女は一瞬だけ視線を少年に投げる。それからまた夜空を見上げた。

「知ってるくせに」

「……うん、知ってる」

切なさを含んだ口調。「僕達は生きてない」という呟きがぼつりと落ちた。生きていないのに、どうして此処に居るんだろ。

少年はズルズルと座り込む。少女は夜風に靡く白い髪を押さえながら、少年に体を向けた。

「私達はトランプだ」

「うん」

「トランプには生きるだの死ぬだの関係無い。神様が其処に作った存在、ただそれだけだ」

「……でも」

そこで少年は一度言葉を切った。そして顔を上げると少女を見つめる。迷子の子どものような、泣きそうな表情。少年の大きな黒い瞳からは、今にも涙が零れ落ちそうだった。

「この世界は酷く懐かしくて、酷く愛おしくて、それなのに酷く遠いんだ」

叫ぶような、けれどもか細い声。少年は両腕に顔を埋め、「ファテはそんな気持ちにならないの?」と問う。少女は少年から目を逸らし、暫く沈黙した。

「……神様は望んでないぞ」

やがて、少女は声を絞り出すようにして言った。少年はグツと息を呑むようにして頷くと、顔を上げて天を仰ぐ。やはり星は見えない

い夜空。

「それでも僕は探したい……見つけたい」

少女は淡々とした口調で「そうか」とだけ応え、徐に立ち上がった。そして袴や着物の袖をパタパタと叩き、砂を払う。そんな少女を見上げ、少年は小さな声で、けれども鋭い目線で問い掛ける。

「ファテは、僕の探し物、本当は知ってるんじゃない？」

少女は叩いていた手を止め、ぴたりと少年を見つめる。漆黒の視線が暫く交錯していたが、少女はふいに顔を背けた。

「私は知らないぞ」

少し拗ねたような声だった。どこか呆れたように嘆息して、続ける。

「私自身のだって、知らないんだから、知るわけないだろ」

冷たい夜風が二人の間を駆け抜けた。少年は少女をじっと見つめる。それから、柔らかに微笑むと立ち上がった。

「そっか。……ねえ、ファテ」

とても穏やかな口調だった。「僕のこと、呼んでみてよ」と言う少年に、少女は小首を傾げる。

「ファテ……で良いのか？」

「違うよ。それはファテの名前でしよう」

「お前もファテだろ。私達は二つで一つの存在なんだから」

「そうだけど。それは神様が付けた僕達の『仮の名前』だから『しろ』って呼んで」

その言葉に少女はぐつと眉を顰め、不愉快そうに目を細めた。

「それは、あの人間の女が付けたあだ名だろ。絶対嫌だ」

凄むような声音で言う少女に、少年は笑った。

「ファテは本当に人間が嫌いだなあ」

妙に間延びした声で少年は言う。少女はフンと鼻を鳴らすと、次の瞬間には白い小鳥になった。小鳥はくるくると少年の周りを舞う

と、屋上から下の街中へと真っ直ぐに飛んでいく。少年は柵から身を乗り出し、街を見下ろした。灯りが忙しなく動く街並み。少年はふわりと柵に乗ると、そのまま崩れるようにして街中へ向かって墜ちていく。

白い影は夜闇に溶けた。



## 神社の少年

木々が風に揺れ、緑色の葉が擦れ合い音を立てる。何段もの階段を上り、古ぼけた赤い鳥居をくぐると、重厚な、そして崇高な雰囲気の手殿が静かに佇んでいた。

### 【神社の少年】

「ファテは神社が似合うよね」

白いニット帽を被った少年は参道の隅で拝殿を見上げながら、隣にいる少女に話し掛けた。風に靡く長い白髪をそのままに、少女は呆れたように俯いた。

「袴だからだろ」

「……うん。巫女さんみたいだなあって」

「巫女は緋袴だぞ」

「うん、まあ、そうなんだけど……」

ひそりと少年は苦笑を浮かべ、少女の白い袴を見た。ふいに少女が小さな石を蹴飛ばす。石は乾いた音を立てて弾むと、鳥居のすぐそばまで転がっていった。それを目で追っていた少女は、ふと鳥居の向こうに人の気配を感じ取り、くると鳥居と反対方向へ駆け出した。大きな木の後ろに隠れ、そっと少年の方を覗き込む。

「え、ファテ……?」

「あら、お前さんも参拝かい?」

少年は少女の方へと伸ばしかけた手を止めると、声の方向へと振り返る。そこには、穏やかな微笑みを浮かべる老婆がいた。

「……はい、そんなところです」

少年はふわりと微笑む。老婆はどこか嬉しそうに「そうかい、そうかい」と言い、手水舎で手や口を清めた。そんな老婆を少年は目

で追っていると、ふと直感した。                      この人の先は、かなり短いかもしれない。

自分達の勘がよく当たることを少年は知っていたが、少年は首を横に振って考えを振り払った。

「お前さん、この暑いのにコートまで着ちゃって、熱中症になるよ」

そう言つと老婆はカラカラと笑う。少年は苦笑いを浮かべ、白い髪を隠すようにニット帽を引っ張った。

境内に澄んだ鈴の音と拍手の音が響き渡る。じつと祈る老婆の姿に、少年は胸の奥に、ジンとした切なさを感じた。

「お前さんは肌が白くて、病気が何かかと思つたよ。若者は、外を歩き回らにやいかんよ」

参拝を終えた老婆は少年の前まで来ると、そう言つた。少年は「そうですね」と小さく笑う。それから、ふと思い付いたように言葉を紡いだ。

「お婆さん。お婆さんはきつと、白いお洋服が似合いますよ」

唐突な少年の言葉に、老婆はきょとんと目を見開いた。少年の漆黒の瞳をまじまじと見つめ、それからカラリと快活に笑う。

「そうかねえ。そんな綺麗な目をして言われちゃ、そうなのかもしれないねえ」

老婆は一頻り笑つた後、少しだけ寂しそうに俯いた。一瞬の翳りに、少年は首を傾げたが、老婆はすぐに笑みを浮かべた。

「それじゃ、お前さんもさつさとお参りして帰りな。親御さんが心配するよ」

そう言つて老婆はゆっくりと頭を下げた。そして、ゆつたりとした足取りで去っていく。そんな老婆に向けて、少年もゆっくりと頭を下げた。老婆が鳥居をくぐり、階段を下りて行つても、少年は頭

を下げ続けた。

「お前、莫迦か」

少女の声に、少年はやつと顔を上げて苦笑した。

「莫迦つて……酷いなあ」

「何が白い服だ」

少女は少年の前に立つと腕を組み、不機嫌そうに少年を睨んだ。

少年は苦笑いを浮かべたまま、鳥居の方を見つめる。

「あの人、先が短そうだったから」

「そんなのは見れば分かる」

「うん、だから……」

少年は俯き、そつと囁く。

「白い服を身に付けてくれたら、僕達の神様の加護があるかもしれない」

生ぬるい風が二人の間を吹き抜け、木々を揺らす。少女は少年から目を逸らし、呆れたように溜め息を吐いた。そして、言葉を放つと口を開いた瞬間、少年の手がそれを制止した。

「分かてる、言わないで」

神様はそんなことしてくれない。それでも、じつと祈るあの姿に、何かしてあげたかった。それだけだったんだ。

少女はぐつと眉を寄せ、少年を見つめた。それから、ふいに丸い瞳を細めて、柔らかく微笑む。

「ま、神様の気紛れもあるかもしれない」

少年は目を見張った。パツと顔を上げて少女を見る。少女がそんなことを言うとは思わなかったのだ。

「私達も、『かつて』は人間だったらしいしな」

「……そう、だね」

「まあ、そんな記憶は無いんだが」

少女は伸びをすると天を仰いだ。青い空はどこまでも突き抜けそ

うなほど遠かった。少年は少しだけ嬉しそうに小さく笑う。

「僕、ファテのこと、好きだなあ」

少女は驚いたように少年を見ると、見る見る顔を赤く染めた。叫びそうな、泣きそうな表情で口を開閉するが、声は出ない。そんな少女を見て、少年は肩を竦めて笑った。

「……この神社、良い神社だね」

少年は目を閉じ、「空気が澄んでる」と続けると深呼吸をした。それから、遠くを見つめて目を細める。

「でも、やっぱり、僕の探し物は無い……」

哀しげに揺れる言葉。切実な祈り。二人の耳に届くのは、木々の葉の擦れ合う音だけだった。

「もう、行こうか」

少年の言葉に、少女は小さく頷く。少女の髪飾りの鈴が、リンと澄んだ音を立てた。

## 深林の少年

林の奥深く、誰もいなかったはずの背後から響いた静かな足音に、少女は肩を震わせる。そして、振り返って瞳に映したその存在に、小さく息を呑んだ。

### 【深林の少年】

真っ白な少年がそこにはいた。帽子もコートも、肌も、何もかもが白い少年。だけれど、その瞳だけは、どこまでも深い黒だった。少年は何かを探すようにキョロキョロと辺りを見回していたが、やがて少女を目に留めると顔を顰めた。少女は慌てて、手に持っていた太いロープを木の根元へと投げつける。平静を装って微笑みを顔に貼り付け、少年に問い掛けた。

「こんなところで、何してるの？」

少年はじつと少女を見つめる。少女は少年の瞳をぐっと見つめ返したが、宇宙のような果てのしない漆黒に、足が竦んだ。沈黙が、胸に突き刺さる。

「尋ね人、と、探し物、です」

ほどなくして少年が静かにそう言つと、少女は小さく首を傾げた。

「人、は、私と貴方以外見てないわ」

少女の言葉に少年は首を横に振ると、苦笑いを浮かべる。

「尋ね人は、人じゃなくて、この位の小鳥なんです。真っ白な」

そう言つて、少年は手で大きさを示した。少女はムツとして、不機嫌に顔を歪ませる。

「尋ね『人』って言つたじゃない」

「……そうですね、すみません」

「そんな鳥、見てないから、さつさとどっか行つてよ」

少女はブイと顔を逸らす、近付いてくる足音に、再び少年の方を見る。すぐ目の前まで来ていた少年に、少女の心臓は驚きで跳ね上がり、思わず一歩後ずさった。

「なっ」

「これから、何をするつもりですか？」

「あ、貴方には、関係無いわ」

「……そうですね」

そう言った少年は、何故かふわりと微笑んで、けれども其処から立ち去る気配は微塵も見せなかった。少女は怪訝そうに眉を顰める。

「どうして、まだいるのよ」

少女の問い掛けに、少年は何も応えず沈黙する。そして徐に、木の根元に転がるロープを手にとると、くるくると巻き取り始めた。

「な、何するの！」

少女が声を荒げると、少年は困ったように微笑んだ。

「君を放っておいたら、神様に怒られそうな気がしたんです」

「は、何それ。それなら貴方は天使だとしても？ 笑わせないで」

少年は黙って緩やかに首を横に振る。少女は少年が綺麗に巻き取ってしまったロープを掴み「返して」と叫ぶように言った。

「……返したら、こうするでしょう？」

少年はロープで輪を作ると首に掛け、後ろに引つ張って見せた。

少女は泣きそうな顔をしながら、それでも怒声を上げる。

「だったら何だっていうの！ 貴方には関係無いじゃない」

「……生命（いのち）を見守らないといけないから」

ゆるりと首を傾げ、「見捨ててしまったら哀しいでしょう」と少年は言う。少女はジワジワと目に浮かんでくる涙を、ぐっと堪えた。

「それは、貴方の都合じゃない」

声が切なげに震える。

世界が嫌いで、絶望して、消えてしまいたい。そうすれば、どんなに楽かと思つた。けれども、どうして引き留める。どうして引き留めようとしてくれる人がいる。世界に、自分が必要だともいうのか。

「はい、僕の自分勝手、偽善です」

少年は柔らかく微笑んで、ロープを少女に差し出した。少女はロープを乱暴に受け取ると、涙を堪えるようにして俯く。

「なんなの、もう。なんなのよ」

少女が吐き捨てるようにして呟いた。二人の間を風が吹き抜け、ざわりと木の枝が音を立てて揺れる。ロープを握りしめる少女の顔を、少年はそつと覗き込んだ。真剣な黒い瞳が、少女を掴んで離さない。

「忘れないください、君を引き留めようとした人がいるということとを」

少年は優しい笑みを浮かべると、少女から一步離れる。少女にはその距離が、少し寂しいようにも安心するようにも感じた。

いきなり引き留めたと思つたら、ふいに突き放して。選択肢あげたでしよつて、貴女の自由選択でしよつて、笑う。そういうのって。

「狡い。貴方は狡い。嘘みたいに狡いわ」

少女は体を震わせた。ロープをぎゅっと握り締め、少年を睨みつける。

「貴方、名前は？」

「……え？」

「名前。自分を覚えていろつて言うのなら、名前くらい教えなさいよ」

少女は「覚えていてあげるから」と、不機嫌そうに唇を尖らせた。少年はどこか嬉しそうに笑う。邪気の無い笑顔が、少女には少し眩しくも思えた。

「『しろ』と呼ばれていたこともあります」

「……何よ、それ」

少年の曖昧な言葉に、少女は不機嫌に顔を顰めた。しかし、少年は困ったように微笑むだけで、それ以上は何も言わない。そんな少年を見て、ふと少女は俯いた。

「全部、しろのせいだから」

そう小さな声で吐き捨てる少女に、少年は首を傾げた。

「全部、何もかも、しろのせいにしてやるから。悪いこと全部、しろのせいなんだから」

「……はい」

「生きたくないのも、死にたくないのも、しろのせいだからね」

少女の言葉に、少年は小さく頷く。そんな少年の振る舞いに、少女は何故だか泣きなくなった。

「……最初から、君は、迷い子だったんですね」

少年がそう言うと、少女の瞳からほろほろと涙が零れた。そんな少女を、少年は静かに見つめ続ける。やがて、少年は微笑みながら「さようなら」と囁いた。少女は震える唇で何かを言おうとしたが、結局何も言えずに口を閉じる。

林の奥へと進んでいく少年の足音だけが、少女の耳に届く。少女は顔を両手で覆うと、声を殺して泣き崩れた。



## 廃屋の少年

林を抜けると、鉄筋コンクリートの残骸とも言えるような廃屋が静かに佇んでいた。無機質なそれに、ゆらりと揺れる白い影を見つけて、少年は廃屋へと足を進めた。

### 【廃屋の少年】

「まだ、怒ってるの？」

コンクリートの壊れかけた柱を覗き込むようにして、少年は訊ねた。視線の先には、体育座りをした真っ白な少女。髪も肌も、身に付けている着物と袴も全て白。少年もまた、同じように全てが真っ白で。だけれど、どちらも瞳だけは真っ黒だった。

「……何も、怒ってない」

少女はそう言うのと、唇を尖らせて俯く。言葉と矛盾するその仕草に少年は苦笑して、少女の隣に体育座をした。

「服、汚れるよ」

「……お前こそ」

「ファテと違って、僕は男だから」

そんなことは気にしない。少年はふわりと微笑んで、少女にもたれ掛かった。少女は顔を顰めたものの、何も言わずに少年を支えたままで。少しだけ、温かいと感じたことが、癪だった。

「……ごめん」

ぼつりと少年の口から零れ落ちた言葉が、無機質な空間に吸い込まれていく。少女は、力強く少年の体を押し返すと、すつと目を細めて睨んだ。

「何が？」

「……分かんないけど」

「じゃあ、謝るな」

「でも、ファテが怒ってるから」

「だから、怒ってない！」

少女は勢い良く立ち上がり、不機嫌に少年を見下ろす。そんな彼女の手はきつく拳を握り締め、震えていた。それから少女は眉を釣り上げたまま、「怒ってないから」と低い声で言う。まるで矛盾した表情と言葉に、少年は内心苦笑しながら「そう」と相槌を打ち、次の言葉を続けた。

「勝手に、どこかに飛んでったくせに」

「五月蠅い。どうせ遠くは離れられないって知ってるくせに」

「うん、知ってる」

少年は笑った。僕達は二つで一つの存在だものね。

少女は拗ねたように、ぶっきらぼうに言葉を落とす。

「片方だけで居続けると綻びが生じるんだ」

「……神様が僕達に嵌めた枷」

少年の言葉に、少女は少し驚いたように、漆黒の目を見開いた。そして、少年の顔を覗き込む。少年は穏やかに微笑んでいた。少年の唇が緩やかに、けれども次々と言葉を紡いでいく。

「僕達トランプは、全ての生命を見守らなければならない。二つは遠く離れてはならない。一ヶ所に留まり続けてはならない。過去の自分を求めてはならない」

「おい」

「全部が全部、僕達の枷」

少年はガラス玉のような瞳に少女を映す。心配そうな表情をした少女に、少年は柔らかく笑った。

「お前、どうかしたのか？」

少女が問うと、少年は矢庭に首を横に振った。

どうもしていない。ただ、そう、いつも考えている。

「神様は僕達を縛るんだね」

「私達は、この世界の残滓のようなものだ」

少女が少年の手を握り締める。殆ど衝動的な行為だった。少女の丸い瞳はゆらゆらと不安に揺れる。足元さえ、ぐらつく気がした。少年は少女の手をそつと握り返し、そして笑った。

「うん。僕達はこの世界で死んだんだよね。神様が、そう言ってた」  
やけに淡々とした口調だった。少女は、握っていた少年の手に頬を寄せる。まるで、何かを切実に祈るかのような表情で。

「……ごめん。大丈夫だよ」

少しの間を置いて、少年は囁いた。少女は少年の手を握る自分の手に、そつと力を込めた。

「私達は二つで一つなのに、お前の考えていることはよく分からなくて困る」

「うん。ごめん」

少女と少年はお互いに苦笑を浮かべた。暗い廃屋で、二つの白い影が寄り添う。

「ファテ、機嫌直ったね」

「だから、怒ってない」

「うん、でも機嫌悪かったでしょ」

沈黙。少女は、気まずそうに視線を彷徨わせる。少年はそんな少女を見て忍び笑いをした。

「ファテは優しいね」

「……え？」

「僕のために人型をとってくれたんでしょう？」

僕が見つけ易いように、鳥型から人型になってくれたんでしょう。少年はどこか嬉しそうに微笑んでいた。少女は唇を噛んで、視線を少年から逸らす。

「別に。人の姿の方が私は好きだし」

「そう？」

「……ただ、人間の前で人の姿をとるのは好きじゃない」  
「そっか」

「人間と馴れ馴れしくするお前も好きじゃない」

「……それで怒ってた？」

少年の問い掛けに、少女は「だから、怒ってないと言ってるだろ」と叫ぶように言った。少年は笑う。心地良さそうな笑い声が廃屋に木霊する。そんな少年を見て、少女は怒っているような、恥じているような、複雑な表情を浮かべていた。

「それで？」

不機嫌そうな少女の声。でも、それが作り物の不機嫌であることを少年は知っている。

「何が？」

「探し物。案外、こういうところにあるかもしれないだろ」

「多分、ないよ。隠し場所として、神様らしくない気がする」

少年はゆっくりと廃屋を見回し、それから長く長く嘆息する。

手が届きそうに届かない、懐かしくて愛おしい、大切な、もの。

在処は神様しか知らない。知ってはならない。

「ファテ」

少年の声に、少女はそつと少年の顔を覗き込んだ。長い白髪がひらりと揺れる。少年は少女の額に、こつんと自らの額を合わせた。どちらからともなく、手をそつと握り合う。

「僕達は、二つで一つでしょう？」

「ああ」

「だからね、もしかしたら……」

廃屋に、生温い風が吹き込む。少女の丸い瞳には、泣きそうに歪んだ少年の顔が映っていた。

「僕はファテという存在を殺してしまうかもしれない」

少年の大きな黒い瞳から零れ落ちた滴は、少女の白い手を静かに濡らした。

## 空地の少年

雑草が茂る広い空地に、頼りなさげな細い木が一本、ぽつんと立っている。真つ白な少年がその幹に寄りかかっている光景は、どこか神秘的で、崇高な絵のように見えた。

### 【空地の少年】

「お兄ちゃん」

幼い少女は隣に立つ兄に声を掛けた。青年はその声にハツとしたように少女を見る。そこで初めて、目の前の景色に見とれていた自分に気が付いた。

「ごめん、カナ。なんでもないよ。今日は先客がいたね」

青年は静かに少女の手を引くと、ゆつくりとした歩調で木へと歩み寄る。そして、少年と背中合わせになるようにして、木に寄りかかって座った。少女もその隣に座り込む。真つ白な少年は振り返り、木の幹越しにその兄妹を見たが、何も言わずに空を見上げた。

「俺はここで本を読んでるから、カナは遊びな」

まるで何もなかったかのように青年は言う　そう、何もない。いつものことなのだ、見知らぬ少年がここにいること以外。

青年の言葉に少女は首を横に振った。

「んーん、カナ、お兄ちゃんという」

そう言って満面の笑みを浮かべる。少女は青年が手にしている本を覗き込むが、全く内容が理解出来ず、やがて兄の肩に頭を預けた。

兄妹と背中で木を挟んだ少年は、徐にその場に座ると、大きな黒い瞳をそつと閉じる。柔らかな風が空地进行を吹き抜けていく。青年が本のページを捲る音と風に揺れる雑草の音だけが、静かに鼓膜を震

わせた。

穏やかで優しい時間が流れる。この空地だけ、世界から切り離されているように、青年は感じていた。

「だーれかさんがーだーれかさんがーだーれかさんがーみいつけた」  
ふいに少女が歌い出すと、青年は本から少女へと視線を移した。  
少女は小さな口を大きく開けて、幼いメロディを奏でる。

「ちいさいあーきちいさいあーきちいさいあーきみいつけた」  
少女はそこで、ぴよんと跳ねるように立ち上がると、ある方向を指さして笑った。

「お兄ちゃん、赤とんぼ見つけたー」  
「本当だ」

「とんぼ、とんぼ、赤とんぼー！ 秋だね、お兄ちゃん」  
無邪気に笑う少女に、青年は微笑み、頷いた。そして「そろそろ帰ろうか」と言うと、立ち上がる。青年の大きな掌が、少女の小さな手を包んだ。

「お兄ちゃん、今日の夕飯なあに？」

「シチュー」

「やった！ カナ、お星様のにんじんがいい」

「えー、面倒臭いよ」

「やだやだ！ 絶対、お星様ー！」

段々と、少年の耳に届く兄妹の声が遠のいていく。少年は横目で兄妹を見送りつつ、少し寂しげに笑った。

『小さい秋みつけた』は、もう会えない母親との思い出を語った寂しい歌だと捉えることが出来るのを少年は知っている。なぜだかそれがあの兄妹と重なって、少しだけ愛おしいと思った。

やがて、一羽の白い小鳥が空地へ滑るように飛んできた。そして、少年の肩へ降りると、耳打ちをするように小さく鳴く。

「うん。やっぱりダメ、だね」

少年は溜め息を吐くと俯いた。小鳥は少年の肩から離れ、空地を一周するように優雅に飛び、それから少年の元へと戻っていく。次の瞬間には、頼りない木の根元で、真っ白な少女が真っ白な少年の頭をニット帽越しに撫でていた。小鳥の姿はどこにも無い。

「……神様が嫌いになったか？」

少女が囁くように問い掛ける。少年はすぐに首を横に振った。

「だって、僕達は神様のための存在だもの」

切なげにそう言う少年に、少女は「そうか」と相槌を打っただけだった。

「……ねえ」

静穏な響きを持った少年の囁き声。少女は何も言わずに次の言葉を待った。少しの沈黙が流れ、柔らかな風が空地の雑草を揺らす音だけが響く。

やがて、少年の唇は静かに言葉を紡いだ。

「ファテは『小さい秋みつけた』って歌、知ってる？」

「知ってる」

そこでようやく少年は俯いていた顔を上げ、少女を見た。少女もまた、じつと少年を見つめていた。視線が交錯する。

「あれって寂しい歌だけど、思い出があるだけ良いよね」

どこか淡々とした声音だった。その意図するところを察した少女は、少しだけ顔を顰めて少年から目を逸らす。

世界を懐かしいと思うのに、愛おしいと思うのに、語る思い出が見つからないのだ。胸が張り裂けそうなほど、世界への想いは広がるのに。

「……綺麗」

ポツリと零れ落ちた少女の声に、少年は少女の視線の先を見た。



燃えるような橙に染まる空がそこにある。世界を包み込むような温かな色。

「夕焼け」

「ああ」

「明日晴れるね、多分」

少年は小さく笑った。明日もあの兄妹は、この空地に来るのだろうか。ふと、そんなことを思う。

徐に少年は立ち上がると、穏やかな口調で「行こうか」言い、微笑んだ。少女は小さく頷くと、辺りを見回す。それから瞬く間に少女の姿が消えると、真っ白な小鳥が空へと舞い上がり、やがて少年の肩へ降りてきた。

空地には頼りなさげな木が一本、寂しげに立ち尽くしたまま。

## 空地の少年（後書き）

小さい秋みつけたの解釈は諸説ありますが、作詞者さんが割とそういう詞を作っているようなので、ここではそっぴい捉え方を書かせて頂きました。

## 洞窟の少年

暗闇の中で、二人分の足音が反響する。松明を片手に、少年と少女は奥へ奥へと進んでいった。

### 【洞窟の少年】

白い肌、白い髪、白い服、少年と少女はどちらもこれらを携えているというのに、今はすっかり闇色に染まっていた。松明の灯りで浮き上がる白がどこことなく不気味な雰囲気醸し出し、畏怖すら感じさせる。

「やっぱり、こういう所は人の姿だと不便だな」

少女は湿り気を帯びた岩に躓きそうになりながら、そこか不満げな口調でそう言った。少年は微苦笑を浮かべて、そっと少女の体を支える。

「ファテは鳥の姿になっても良いよ？」

「……嫌だ。トランプとしての役目を、お前に任せてるみたいだから」

「そう？ 鳥の姿も、神様がくれたトランプとしての立派な姿だよ」少女は沈黙して、少年の腕を掴んだ。足場が悪い。暗い上に濡れて滑る。少女は眉を顰めると、ふっと長い溜め息を吐いた。

「鳥の姿は、足場の悪い道を行くときや、鳥と話するときには便利だが、それだけだ」

「充分だよ」

「トランプの片割れのみが姿を変えられるというのも、不便だ」

少女に背を向けて歩いていった少年は振り返り、少女を見た。

「神様がやることには、全て意味がある、でしょ？」

なぜか苦笑いを浮かべる。結局のところ、少年にも理解出来ないのだ、神様の意図など知る由もない。

「ああ」

頷いた少女も、同じように苦笑いを浮かべていて。所詮自分たちは、神様にとっては使い捨てのカードなのだと思い知る。

「……少し休憩でもする？」

少年は大きな岩をそつと指差して「座れそうだし」と続けた。湿り気を帯びた岩に少女は顔を顰め、それに気付いた少年は小さく笑う。

「仕方ないよ」

「分かってる」

「でもファテ、すごく嫌そうな顔してる」

少女は唇を尖らせると、無言で岩に腰掛ける。とても控えめな座り方だった。少年は笑いを堪えながら、少女の隣に寄り添うようにして座る。そして、ぼんやりと松明を見つめた。松明の灯りがゆらゆらと揺れ、風の流れがあることを示している。少女もまたその灯りを見つめ、甘えるようにして少年の肩に自分の頭を預けた。

「いつだかお前は言ったな。『ファテ』という存在を殺してしまうかもしれない、と」

少女の言葉に、少年は肩をびくりと震わせた。それは喫驚か、動揺か、はたまた恐怖か。少女には分からなかったが、それでも少年を安心させるように、自分の手を彼の手にそつと重ねた。

「それを聞いたとき、おかしいと思った。トランプは生きている存在じゃないんだ。殺す、というのは有り得ない」

「うん」

少年は、喉から声を絞り出すようにして相槌を打つ。そんな少年に、少女は小さく首を横に振った。そして、何かを祈るようにその瞳を閉じる。

「でも、そうなんだ、とも思った。有り得ないけど、そうなんだろ？」

「……うん」

声を発する少年の唇が震える。泣きそくに顔を歪め、ぎゅっと唇を噛み締める。少女はそつと少年の顔を覗き込むと、彼の頬に自分の手を添えた。

「いいぞ」

「え？」

「お前が望むなら、ファテという存在を殺しても」

「でも、僕は……っ」

ファテを殺したくない。存在を失いたくない。そう、この願いは自分だけの望みで、ファテという名のトラップの、片割れだけが望んでいることで。巻き込んでほらないのだ、大切な片割れを。

少年は不安げに視線を彷徨わせる。そんな少年に、少女はふわりと微笑んだ。

「知ってるか？ お前も私も『ファテ』なんだ」

少女の言葉に、少年は目を丸くする。知らなかったわけではない、今更何を言っているのかという驚き。少年には少女の言葉の真意が理解出来なかった。

「私とお前は二つで一つ。だからこそ、お前の願いは私の願いで、同じことを望み、欲する」

「そ、んな、理論は……」

「成り立たないとは言わせない」

少女の真剣な瞳に、少年は息を呑んだ。胸が震える。目の奥がじんわりと熱くなる。その理由が少年には分からない。

「私だって、本当は探したいんだ。でも、それは神様が望まないことだ。きつと……赦されない」

「うん。だから」

少年の言葉が不自然に途切れる。彼の唇の前に持ってこられた、人差し指を立てた少女の手が少年の言葉を止めたのだ。

「ああ。そうかもしれない。そう、だって、愛に溢れた無慈悲な神様だから」

そこで少女は笑い、囁くように「でも」と続ける。少年はじつと少女を見つめていた。ふらりと松明の灯りが揺らぐ。

「私達の望む先にあるのがそれなら、仕方ない。神様に逆らうんだ、仕方ないだろう」

そつと浮かべられた少女の微笑みは、少し哀しげで、切なくて。少年は縋るように少女の肩に顔を埋めた。

「ごめん、ファテ。ごめんね」

「馬鹿。私も見つけたいと言っているだろう」

「うん。でも……ごめん」

少年の掠れた声。それを聞いたら少女はどうにも泣きなくなってきた。けれども松明の灯りを見つめて、ぐっと堪えた。そして、少年の肩を掴み、顔を突き合わせる。

「まだ、分からないだろ」

半ば、叫ぶような声だった。相手を無理やりにも説得しようとするような声音。少女の言葉に、少年は泣きそうな顔で、それでも笑顔で頷いた。

「うん。まだ分からない」

少年と少女は微笑み合う。胸が痛くて、泣きたくて、だけれど少年は、何故かとても温かな安心感を覚えていた。

「探そう。見つけようね」

「ああ、一緒に」

「うん、一緒に」

少年はそつと少女の手を握り、少女もまた、そつと握り返した。松明の灯りは儚くも力強く、希望に満ちているように見える。

「僕、やっぱりファテのこと、好きだなあ」

どこか切なさを感じさせる声色で、少年は言う。少女は小さく笑い、「多分、私もだ」と応えた。

「……どうしてだろう」

少年はふと呟く。少女は小さく首を傾げ、無言で次の言葉を待った。

「探し物、すごく近くにある気がする」

松明の灯りがゆらゆらと揺らいだ。

## 湖畔の少年

暗い洞窟を抜けると、視界に差し込む柔らかな光。少年と少女は目を細めながらも、目の前に広がる景色に息を呑んだ。

### 【湖畔の少年】

「すごい……綺麗な湖」

感嘆混じりの少年の声に反応したかのように木々が揺れて、一斉に鳥達が飛び立つ。少女は鳥の声に耳を澄ませながら、たおやかな白い掌で湖の水をそっと掬った。水面が揺れ、きらきらと光を反射する。

「ここに『人』が足を踏み入れたのは、久し振りなんだそうだ」

鳥の声が聞こえなくなり辺りが静まり返った頃、少女は凜とした口調でそう言った。少年が「鳥がそう言ってた？」と問うと少女は静かに頷く。

徐に少女は白い袴の裾を捲り上げ、湖に足を浸けて、岸に腰掛けた。少年もそれに倣い、白いズボンの裾を捲って、湖に足を浸ける。ひんやりとした心地良い感触。

「水、冷たいね」

少年の言葉に、少女は小さく頷く。そして目を細めると「気持ち良いな」と呟いた。

「女神が住む湖だとか、そういう伝説は莫迦だと思っていたが、こういう湖なら頷けるかもしれない」

恍惚とした声音で少女はそう言いながら、足で水を弄んだ。音を立てながら上がる水飛沫が、光を反射して輝く。

「神様も、こういう場所は好きかなあ」

少年の呟きは、湖へと吸い込まれていく。少年は揺れる湖面を見



つめ、ふつと溜め息を吐いた。穏やかな風が吹き抜けて、湖を囲む木々を揺らしていく。

「……好きそうな気がするな」

少しの間を置いてから少女は静かにそう言っ、少年を見やる。少年は少しだけ口元に笑みを浮かべ、湖に向けていた視線を少女へと移した。二人の真つ黒な瞳にお互いが映される。

刹那、強烈な感情が二人の軀を駆け抜けた。軀を突き抜けそうなほどの衝動を与える感情。胸が張り裂けそうなほど痛くて苦しい。けれども、とても懐かしくて愛おしい。目の奥がジンと痛いほど熱い。

「ど、うして……」

声が喉奥に詰まって、上手く出て来ない。それ位、愕然としていた。呼吸の仕方すら忘れてしまったかのようだ。

「どうして、気付かなかったんだろう」

少年はそつと少女の目元に触れた。ふいに少年の瞳から流れ出した涙は留まることを知らず、ただただ溢れ続ける。それは少女も同じで、瞳から溢れだす涙をそのままに、少年の目元に触れた。

「ああ、本当に……」

「こんなところに……こんなに、こんな近くに、あつたなんて」

胸の震えとともに、声が震えた。脳裏に様々な記憶がフラッシュバックする。愛しくて、懐かしくて、とても大切に、だけれど遠くへ失ってしまったと思っていたもの。でも知りたくて、見つけたくて、取り戻したくて堪らなかった探し物。そう、それは、この世界の記憶と、本当の名前。かつての自分自身、本当の自分。

そうだ、僕は、私は、かつて、この世界に……生きていた！

いつの間にか、少年の白い髪は艶やかな黒髪に、抜けるように白い肌は健康的な色を取り戻し、黒い瞳は濃い褐色へと変化していた。

少女もまた、柔らかな褐色の髪に、少年よりは白い健康的な色の肌に、茶色の瞳に変わっている。そう、それはこの世界に生きていたかつての姿。だけれどそのときと違うのは、軀が透けていること。きらきらとガラスの破片のように、軀が崩れていくのを彼らは感じていた。

「やっぱり、赦されないんだね、僕達は」

哀しげに顔を歪め、少年は少女の手に指を絡めた。温もりを感じるのに、段々と触れている感覚すら分からなくなってくる。胸の奥は歓喜に震えているのに、悲嘆に暮れていて、痛くて痛くて堪らない。

「まるで、湖に溶けていくみたいだな」

温かく包み込むような口調でそう言って、少女は笑う。瞳からは涙が溢れているというのに、どうして笑うのか、少年には分からなかった。

「ファテに、消えて欲しくなんかなかった。僕だけで良かったのに。僕ばかりが求めてたのに」

少年は少女と絡めていた指に、より一層力を込める。もう、本当に触れているのかさえ分からない。温もりすらも薄れてきて。透けた軀がきらきらとほどけていき、視認すら難しくなった。

「お前と二つで一つで、『ファテ』で良かったと思う。本当だ」  
どこか必死さを孕んだ少女の声。その言葉に、少年の胸が苦しくなる。嬉しい、嬉しい、だけど、哀しい。辛くて哀しくて堪らなく痛い。

「最期に、聞いて欲しい。私の本当の名前」

「うん。僕の名前も聞いて欲しいな」

囁き合って、微笑み合う。

やっと取り戻した自分自身を知っていて欲しい、長きを共に過ご

してきた大切な片割れに。

「私の本当の名前は」

「僕の本当の名前は」

少年の瞳に僅かに映る少女の笑顔は日だまりのように温かく、何かが吹っ切れたように明るい、そんな笑顔だった。少年も釣られて笑う。切なげに、儚げに、けれどとても幸せそうに。

そして思う。

一緒に探したいと言ってきて、見つけたいと言ってきて、嬉しかった。愛に溢れた無慈悲な神様は、トランプのこの結末を望んでいなかっただろうけど、元を辿れば、この結末を仕組んだのは神様だ。赦されないけれど、赦して欲しいとも思わない。ただ、この結末を予感しながらも、一緒に探し物を見つけてくれた片割れが、大切に愛おしくて、消えて欲しくなどなかった。ごめん、ごめん  
本当にごめん。何度も胸の中で謝罪して、最期に少年の唇が紡いだ言葉は。

「ありがとう」

少女の胸が、歓喜に震え上がったことを少年は知らない。

やがて、少年と少女はきらきらと溶けていくように、湖に吸い込まれるように姿を消した。最後の二人の表情は、温かさに満ち溢れていて。

誰もいない湖の水面は音もなく揺れていたが、ほどなくして波も消え、辺りを静寂が支配する。先ほど飛び立った鳥達は静かに舞い戻り、木々に降り立つと、鳴き声を上げることなく湖面を見つめていた。

## エピソード

昔々、神様はたった一人で世界を見守っていました。

しかし、世界はたった一人で見守るには広すぎたのです。

そこで、神様は一〇四の存在を生み出しました。

その存在はかつて、この世界を生きていました。

しかし、その記憶は世界を平等に見守るには妨げになるだろうと神様は考え、名前と共に記憶を奪い、隠したのです。

彼らを二つで一つとし、一つの名前を与えることで、彼らの存在を縛りました。

そして、神様は五十二組となった彼らに様々な枷を嵌め、自分の切り札として世界中にばらまきました。

彼らは神様の切り札（trump）、神様のための徒歩旅行者（tramp）、『トランプ』として世界を歩き回って見守るようになったのです。

これは、一つのトランプの片割れが、自分の名前と記憶を求めた物語。

最期にファテという名のトランプは何を思ったのか、それは彼らにしか知り得ない。

神様にすら、知る術はありません。

けれども、一つ欠けてしまったトランプを、何事も無かったように補い、神様は今日も変わらず、世界を見守るのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2853r/>

---

トランプ

2011年10月31日03時18分発行